

ラジオの雨

演歌の好きな曾祖父は、闊達な声で喋っている。

「演歌は坂本冬美、決まっとる。いつまで経っても来ぬ人と、死んだ人とは」

ここ一年着ることのなかった黒いスーツは、曾祖父の体が縮んだことを明らかにしていた。曾祖母は齒のない顔をほころばせ、また始まったよ、と揶揄した。白寿近くながら、黒い紋付きの着物を着ると、目つきが美しく若くなった。笑いながら、目だけをあさぎへ向けるのである。曾祖母はうんざりしている。彼女を、一度だけ激怒させたのが、曾祖父が懸想した坂本冬美好きの女だった。

あさぎは曖昧な返事をした。心は別にあつた。四月の空から花散らしの雨が降り、白砂の庭に華やかな香りが落ちていく。レースカーテンのような雨の中で、古木の桜が咲いていた。

季節は溝の壊れたレコードのように同じ旋律を繰り返す。しかし、なにも同じ日に同じ景色を見せなくてもいいじゃないか。あさぎは耳障りな春雨の音を聞きながら思った。兄の初七日も四十九日も一周忌全て、春の雨の日だった。

「あさぎ、私のイヤリングを知ってるかしら」

襖を開けて入ってきた母は右の耳を押さえている。探しているのは三年前に慌てて購入した真珠だろう。あさぎは首を振った。母は紅をひいた唇をすばませた。

「そう。ところで、用意はできたの」

「何の」

瞬きをする短い間、あさぎは何を訊かれたのか判断に窮した。三回忌の準備はできている。しかし、心は三年前のままだ。兄が生きているような気がしてならない。世界の裏側で勝手気ままな旅をしているような心持ちがする。曾祖父が笑みを葬った。

「何でこんなことになっちゃったのかねえ」

「知りません。運命だったんしょ」

三年前の葬儀と同じ言葉だった。曾祖母はにべもなく切り捨てた。複雑な軌跡

をたどった故に言える言葉だった。母は曾祖母の肩を撫で、背を向けた。

「あさぎ、行きましょ」

曾祖父は畜生、畜生と舌打ちを繰り返している。曾祖母は肩を震わせていた。あさぎはその様子を見ながら、立ち上がった。兄が生きていれば何を思うのか、考える。生きていれば、という仮定に違和感を抱く。やはりまだ、生きている気がする。目を細めれば、雨で煙った中に佇んでいるようだ。トレードマークのチューリップ帽を被り、使い込んだ麻袋を引き摺って。

親戚一同が会した三回忌は、あっけなく終わった。四十九日の法要の時は小さな嵐が来たように話し声と忍んだため息で騒がしかったのであるが、三年目ともなるとかき消えている。誰もが目を閉じて、うなだれている。兄があゝの世で上手くやっていることを願っている。旅から旅への暮らしを終えて、今頃は一つ所に腰を据えているだろうと夢見ている。数珠を持つ曾祖父の手はミシン針のように細かく震えており、その縮んだ体を曾祖母が支えていた。あさぎは時々首を動かして、こりをほぐす仕草をした。

あさぎだけが、取り残されている。兄の死を乗り越えることができない。抵抗をもって受け入れている人々を、彼女だけが背後から眺めている。四十九日や一周忌を経験しても、未だ兄の姿を探してしまうし、黒い背中を丸める人々のように遺影だけを見つめ続けることもできない。兄が一つ高くした桐の棚から、八重歯を覗かせて、右肩を頬へ引き寄せて笑っている。幼い頃から変わらない癖のままだ。兄の周りの背景は真っ青で、他の写真から切り取られたカラージュであることは明白だった。

偽りの背景に飾られた遺影は、兄の死を喚起するには力が足りない。死に化粧をした美しい顔は、あさぎが辿り着く前に灰となっている。骨を拾って砕いた時の簡単な音は呆気なく、あさぎの前に強烈な壁として立ちはだかつてはくれなかった。

故に、現実味もなく経の声をぼんやりと聞いている。

粛々とした儀礼は終わり、親戚達は身内の話を肴に酒を飲んでいる。叔母のなにかさんが浮気をしているらしいとか、その浮気に旦那も気付いているらしいとか、何に根拠があるのか、事実すら読み取れない話ばかりだ。あさぎは母に断りを入れて席を外した。今度は曾祖父の浮気の話が持ち上がっている。曾祖母の気も読めない無礼な親戚達が、ろれつの回らない舌で騒いでいる。

座布団の散らかった遺影の前で、すおうが遊んでいた。すおうは叔父夫婦の娘で今年七つになる。活動的な少女で近所の男の子と喧嘩をすることもあるそうだが、遊び相手もなく大人しくしていた。彼女はあさぎを見つけ、不思議な機械の塊を持って走り寄ってきた。

「おねえちゃん、これみて」

彼女の父が機械技師だからなのか、彼女はリカちゃん人形やキャラクターグッズよりも珍しい機械を好いている。差し出したのはあさぎも実物を初めて見るゲルマニウムラジオだった。外装はなく、配線が露出している。はんだでつなぎ合わせた回線は平たく無駄がない。すおうは自慢げである。

「コンセントがなくても、きけるラジオなんだよ。私が作ったの」

「そうなんだ、すごいね」

あさぎは座布団の一つを引き寄せて座った。少女の頭を髪の毛の流れ通りに撫でやる。少女はワンピースの裾をくしゃくしゃにしながらはにかんだ。林檎の赤に色づいた頬へ、えくぼができる。彼女は自分で作ったと得意げだが、実際にはんだ付けなどは彼女の父の仕事だろう。すおうは銀色のプッシュボタンを指した。

「これがラジオのスイッチなんだよ。入れてみるね」

「すおうは、もう聞いてみたのかな」

「うん。でも、うまく入らないの。ずっと、だれかがおしゃべりしているみたいで」

思い通りにならないで、不満らしい。頬をぷっくりと膨らませてチャンネルつまみを回している。聞き取れる周波数に近づくと雑音が波立ち、海のような

うねりを作る。時々、音楽番組のピアノ音が弾けた。ところがすおうは細かく回すことをせず、大胆な動かし方をしている。あさぎはすおうの手をとって、

「ねえ、ちよっとおねえちゃんに貸してくれるかな」

ゆつくりと音のある場所を探した。雑音が濃くなったり薄くなったりする。ドラムのリズムやリスナーの声が近づいては遠ざかる。すおうもあさぎの指先へ視線を注ぎ、小さなスピーカーからのメッセージに耳を傾けている。あさぎは指を動かしながら幼い親戚の横顔を眺めた。

すおうは兄の顔を知らない。すおうが生まれた時、兄は日本を離れ、ミャンマーにいた。国際電話で祝福を贈り、日本へ戻らずにベトナムへ旅立った。折り返して兄は母に電話をしてきたが、何時日本へ帰ってくるの、という問いに、真面目に応えることはなかった。そのうち、そのうち、と返し続けたまま、ついに帰ってくることはなかった。

すおうは今日親類縁者がどうして集まったのか、よく分かっているまいだろう。一人大人たちの席から離れてきたあさぎを見つけて、一緒に遊んでいる。そして、あと一月もすると子供の猿のように小さくて真っ赤な双子の、お姉さんになるのだ。

兄のことを知らない子供が、新しく生まれてきているのである。子供たちは兄の死んだ過去はなかったかのように健やかに遊んでいる。対してあさぎは湖に架かる橋を渡らず岸辺をずっと歩くように、三年前の当時からずっと、事実を避けている。兄は長い長い旅に出ており、秋空に浮かぶ羊雲のように世界を巡って、突然帰ってくるのだ。おとぎ話のような希望を抱いている。

探り当てるように動かしていたチューニングが、徐々に雑音を消して声を捉え始めた。ラジオの中は、外の天気と同じく雨らしい。誰かが熱い息をしている。若い男の息だ。

「なに、これはなんの音。だれかがなにか言ってるよ」

すおうがあさぎのワンピースをひっぱった。雑音は消え去り、明快な音がでるようになった。しかし、雨の中に男が佇んでいるだけでは、ラジオドラマにもな

らなかった。

「何の音だろうね」

答えながら、あさぎは半分開いた障子から庭を眺めた。木の葉か何かが視界のすみを横切ったようだった。腰をくねらせた古い桜が白い砂の中にぽつんと佇んでいる。白い砂へ砂糖粒のように細かい雨が降り注いでいる。兄には海外へ行ってもたまに日本へ帰ってくる時期があった。決まって玄関から家に入らず、白砂を踏んで縁側からあがって来た。途中、桜の下に立って、家の誰かに気づかれるまでそれを愛でていた。あさぎは兄が根元に座り、静かに本を読んでいるのを何度も目にしていた。今、庭の桜は頭を下げ、喪に服しているように見える。梢や花びらの先を流れる雨は、涙のようだった。兄のことを悲しんでいるようだった。

桜の蔭で、何かが動いた。

「何」

あさぎは体を伸ばした。背の高さや体の厚みに見覚えがあった。けれども、いるはずはないのだ。疑いながら信じ、あさぎの目が彼を追う。黒い影が走り去っていく。咄嗟にラジオから手を離れた。はずみがついて指先がつまみの上を滑り、嵐のような**僕の写真は燃やしてくれ**雑音が溢れた。あさぎは動きを止めた。突然の声に、心臓が飛び跳ねた。足の先から髪の毛まで、電気が走る。あの低い声は、間違いない。帰ってきたのだ。

あさぎは急いで縁側に飛び出した。あの姿は見間違いかもしれない。冷たい板の上から庭を隅々まで眺めた。いない。桜の蔭にあった何かは消えている。白砂が雨の重みでばらりと崩れた。あさぎの感じた気配は何もない。ラジオは嵐の音をたてている。

「おねえちゃん、どうしたの」

すおうがあさぎの背中へ声をかける。遠くからは親戚の声が聞こえてくる。けれども、あさぎはラジオの声を確かに聞いた。聞き間違えたはずもない。三年間探し続け、もう二度と耳にすることできない、懐かしい声だった。その兄が、写真を燃やし、忘れてくれと言った。

「兄さん」

あさはきは空を見上げた。春雨は温かく降り注ぐ。雲の切れ間に青い空が覗いている。しばらくすれば、雨は上がるだろう。